

菅原太郎　西洋演劇史　　演劇出版社

ヨーロッパの近代劇がわが国へ移入されたのは周知のとおり前世紀末から今世紀初頭にかけてであったが、丁度そのころヨーロッパでは演劇が何よりも劇場で上演されるものとして扱われるようになり、演劇界は従来の劇文学偏重の傾向から脱しようとしていた。そうして演出を重視し、俳優を前面に出して、劇の上演を対象とした独立の演劇学が提唱されたのは今世紀も20年代に入ってからである。

演劇そのものの歴史は長いのに拘らず、これを対象とした学の独立がこんなにも遅いのは、これがきわめて対象になり難い要素をいくつも含んでいるからであろう。そのおもな理由は劇上演がしばしば繰返し同じ作品を扱ってはいても、上演の度毎の一回かぎりという性格から必ずのがれられないところにあり、したがってすぐれた演出も名優の神技も決して再生できないというところにある。録画して保存してもその時の生ける全体、たとえば周囲の状況、観客の反応までは記録できないし、激しい感動は元来持続にたえず、また反復をゆるさないからである。しかもその一回性にこそ、他の芸術ジャンルにない演劇の特色、つまり人間の生とともに消長する時間性が含まれているのである。

1056ページにわたるこの大著は、そのわかり演劇学での成果の乏しいなかで、めずらしくも達成された、わが国で最初の全ヨーロッパの演劇史である。著者のあとがきによれば、当初学生の手軽な参考書をと考えられたのが、永年のノートやメモなど使われているうち長くなった由であるが、まことに親切な書物で年表、索引も完備していて、辞書の用にもたえるありがたい本である。

巻頭の新関良三博士——著書はこの恩師にこの書を捧げられた——の序文にも書かれているように、この演劇史の特色は演劇を終始実際に上演される形としてみられていることである。これは上述の演劇学の趣旨と一致する。著者が戦前ウィーンのラインハルト研究所および国立図書館演劇資料部長ヨゼフ・グレゴア教授のもとで学ばれた、演劇学への視点であろう。

劇場や舞台の構造についての研究は著者の本領とされるところである。たとえば第3篇ルネサンスの演劇——第1章イタリア——第3節新しい舞台形式（近代劇場の成立）には多くの写真を入れた——最少限度の数をしかも縮小してと著者は心残りをあとがきで示されているが——詳しい当時の劇場と舞台の叙述があって、劇場と舞台の構造がここで大きく飛躍したことが、劇の上演に具体的にどんな効果をもったかが功罪ともにのべられている。そうしてこれが当時の美術とふかく関連しながら発達して

いることを、読者に興味深く肯かせるのである。また第7篇18世紀各国の演劇——第3章ドイツでは、劇場の名が多く節に配され、ハンブルグ国民劇場、マンハイム劇場、ウィーンのブルク劇場、ワイマル劇場およびベルリン国民劇場が、レッシングを始祖としてシラー、ゲーテによって開花したドイツ劇黄金時代の場を、どう支えて行ったかが具さに語られている。

さらに第4篇——第5章当時の名優達をはじめ、それぞれの時代での俳優たち、劇団、芸能人組合および劇場運営、時には観客にいたる記述も少ない。こうして前述の劇場と舞台、そして人々に感動を与えてやがて去って行った人たちが描かれると、どうしても後世に残しえない名演の瞬間の輝きに読者は想到するのである。

演劇の上演は多数の人手、様々の小道具、演しものの前ぶれ等々の複雑な手数を経てはじめて実現にいたる。主催者にとってこれはいつも賭けであり、場合によっては冒険でもある。劇場とは観客が作品と配役とを心で呟き、その扉に吸いこまれて行くローレライの岩であろう。その制作者と観客との博奕にも似たときめきが、この本の各時代についての具体的な叙述によって読者に伝わって来るのである。これが演劇史というものであろう。

いわゆる演劇学者は、演劇を独立の学としようとして文学の支配から脱しようとするあまり、往々にして戯曲を軽視しようとする傾向がある。実際、ゴードン・クレイグやアントナン・アルトーのように戯曲を否定しようとした舞台人もあった。この本の著者はそうではなく、上演に焦点をおきながらそのなかで戯曲を大切に扱われている。著者のあとがきには戯曲の梗概や内容紹介を省略するつもりであったが、同僚の方の忠告によってこれを入れることにしたと書かれている。この本の叙述の仕方から、この省略の意図はおそらく著者の戯曲無視によるのではなく、それらは他の本を調べればわかることであるからであったろうと推察される。この本の使命をそこではなく、他におかれようとしたのであろう。忠告をいれられて初心者にとっても専攻者にとっても便利な本となったが、あるいはそのため著者のもとに資料の多い、したがって識見ゆたかな部分を、不本意に割愛される憂目をみられたのではないかと案じられる。

試みにその上演と結ばれた戯曲の紹介の若干をあげてみよう。たとえばシェイクスピアの作品の特色としての筋の面白さをあげるのに、例としていくつかの作品の筋を語って行く。そのひとつがこうである。

「見事な武功を挙げて凱旋してきたマクベス將軍とバンクオー將軍は、荒野に現われた怪しげな魔女達から薄気味の悪い言葉で迎えられて予言を与えられる。ダンカン王からマクベスへの恩賞の沙汰が伝えられる。魔女達の第一の予言がぴったりと当たった。まさかとは思ひ乍らマクベスの心には、では二番目の『王になる』という予言も実現するのではないかという考えが浮んで来る。観客の心もマクベスの心を察して引き込まれて行く。マクベスが王になる！ 王ダンカンを殺す！ 観客はその空想を

追い乍ら慄然とする。——幕開きと共に、事件が判り易く速いテンポで展開して行く、an early opening であると共に、早くも、次に展開されて行く事件の様子や雰囲気、期待、危惧が観客の心に映し出されて来る。……」(285—286ページ)

そうかとおもうと、シラーの作品の前半はマンハイム劇場の節に、上演を主軸としてかれの評伝に織りこまれ、後半はワイマル劇場の節にゲーテとからませながら書かれている。大作『ワレンシュタイン』については、刊行本から筋を紹介したあと次のように記されている。

「祝祭的な明るい色調を以て飾られた新劇場は、俳優フォスがマックスの扮装をして述べたプロローグによって開場され、ゲーテの演出による(ワレンシュタインの第一部)『陣営』が上演された。前日の舞台稽古にはシラーも立会った。ゲーテが最も苦勞したのは、いろいろなグループの兵隊やその他の人々を、どういう風に舞台の上に位置させるかという点であった。彼は三〇年戦争に関する、手に入る限りの木版画を集めて研究した。……」(623ページ)

演劇は舞台で演ずるから文芸よりもより大衆的である。したがって各国間の交流も活潑であり、人々に上演が与える影響も広汎にわたる。他方には多数の人の移動に伴う小まわりのきかない障害もあるのだが。この本にはその演劇独自の各国の相互関係が楽しく書かれている。古代ギリシア劇がヨーロッパ各国へ遠く深く浸透した状況をはじめ、コムメディア・デッラルテが近世各国へどんなに図りしれない影響を与えたか、シェイクスピア、モリエール等の作品の各国における夥しい上演の数々など、著者の筆致はこの交流が演劇の自然であるかのようにむしろさりげない。

今更いうまでもなく、著者の演劇史文献の渉獵はおどろくべき量にのぼっている。じつに忠実な引用ケ所の指摘がそれを語っているが、しかし読者に煩わしさを感じさせることなく、流暢に書きすすまれている。演劇学のみならず演劇に関する書物は時に肩を怒らせ、世を革めようとするかのように威丈高であるが、ここでは著者の人柄そのもののよう、そういう気配もない。それどころか随所にみられるまことに謙虚な言辞に頭の下る想いがする。

終りに近く二人の演出家アッピアとクレイグに一節がさかれたあと、終章は著者が劇芸術の革新を実現した人とよぶマックス・ラインハルトに当てられている。こうして輝かしい古代ギリシアから辿られた道は、演劇が真に自律的な芸術として出発した日々をもって終っている。

むすびの言葉として著者は

「われわれの生活している現代は、20世紀の前半期からの自然科学的な文明や機械の目ざましい発達の為に却って、人間の精神的文化の拠り所が寔に不安定になっている。演劇文化もその例にもれないので、現象的にもむしろ動揺混乱の激しい時代と云わなければならない……。未来の楽しい演劇を期待される萌芽はまだ判然とは認められないようである。古いものを頭から否定しないで、謙虚な気持で何度も繰返して再

検討してみる必要があろうかと深く感じる次第である。」

とのべられている。

著者のこの労作からすでに幾多の恩恵を蒙りながら、それでもまだ、他日著者が、かつて美学会機関誌「美学」に書かれたような劇場・舞台についての詳論を一本にまとめて刊行される日を、多くの演劇関係者が期待してやまないと付言するのをゆるされたい。

(木幡瑞枝)

心 理 学

Helping behavior の実験社会心理学的 研究についての文献リスト

1. helping behavior

helping behavior (援助行動) あるいは altruism (愛他心) に関する実験社会心理学的研究は、主として米国において、最近約10年の間に急速にその数を増してきた。といっても、約200例ぐらいのものではあるが。

L'Armand, K. & Pepitone, A. (1975) は、援助行動には other-rewarding なものと、other-relieving なものとがありうるという。前者は「他者に reward を提供するという行動を通じての援助であり、たとえば、子供が自分の入手した菓子を、他の子供たちにも分配するといった行動」であり、後者は「他者を危険から守ったり、苦痛から解放するための行動」である。このようにいっていても、他者を危険から守ることは当然被援助者への reward の提供という機能を果すことになるから、本質的な分類とはいえないのであるが、援助行動の中に「苦境にある他者、あるいは苦境に陥るかもしれない他者への援助のみでなく、もっと一般的に、他者の望む状態を実現するための援助も含めるべきである」との主張と理解することもできる。

したがって、援助行動とは「他者が望む状態を実現するために手を貸す行動」として捉えておくことが現実的である。しかし、人間の行動には、その行動者自身にとっても全く思いがけない効果を生むものがある。妨害的意図をもって行ったはずの行動が、逆に当面の相手への援助の効果を生じてしまうこともありうる。それ故、行動の結果のみから援助行動を定義すると、一見一義的に把握しやすいようではあるが、行動の心理的意味を捉えにくくなる。とはいうものの、行動の定義に際して当面の行動の意図あるいは動機を含めると、意図や動機の判定に伴う困難を如何にして克服すべきかという問題に立ち向かわねばならなくなる。たしかに、行動の意図や動機をあらゆるばあいに正しく知ることは不可能ではあるが、前後の状況からみて援助的な意